

木瀬康太氏の博士号（学術）学位請求論文『初期キェルケゴールにおける美学——美的「宥和」論の構築——』は、『あれか、これか』以降、本格的な著作活動を始める前のいわゆる初期キェルケゴール（1834-1843 年）に注目し、「イロニーからの自由」という問題意識のもと、美的「宥和」についての理論を構築していく過程をたどった研究である。

本論文において木瀬氏は、ヘーゲル、シュライアーマッハーに代表される同時代の哲学・宗教思想や、ゲーテやモーツァルトらの芸術作品、ハイペーアなどデンマークの先行世代の言説を踏まえつつ、19 世紀コペンハーゲンの思想史的状況からキェルケゴールが独自の美学思想を展開していくプロセスを詳細に跡づけている。あつかう一次資料の大部分は、著者の死後刊行された日記や草稿類であるが、木瀬氏がデンマーク語のテキストを根気よく読み解きながら、難解をもって知られるキェルケゴール思想の一側面を描き出そうとしている点は評価に値する。

本論文は、序論と結語を除き、七章から構成される。

序論「本論文の研究視角と研究方法」は、若き日のキェルケゴールが取り組んだ自由の問題に焦点を絞りながら、イロニーという美学的概念が果たす役割を提示する。さらに、キェルケゴールにおける「美学」という概念の用法を検討するとともに本論文の研究方法を述べる。

第一章「「イロニーからの自由」という課題」は、神学生だったキェルケゴールが、シュライアーマッハーの神学を研究するなかで、人間の自由の問題に行き着くまでの流れを描く。キェルケゴールは、自由と必然性のような対立する（共約不可能な）規定同士の絡まり合いをイロニーと呼ぶが、コンテクストに応じて「自然におけるイロニー」、「人生のイロニー」、「世界のイロニー」などさまざまなヴァリエーションが見い出される。こうした「イロニーからの自由」が、キェルケゴールにとっての思想的課題として意識されるに至った経緯が論じられる。

こうした問題意識を受けて、続く第二章「美学研究の開始」では、神学研究と並行し、かつ、既存の神学への批判を強めながら、キェルケゴールが美学の問題に取り組み始める時期があつかわれる。この時期は、厳格な倫理的・宗教的教育を目指していた父への反抗と重なるが、そうした教育の理想に反するような人物像——ドン・ファン、ファウスト、永遠のユダヤ人——の研究にキェルケゴールが没頭する時期でもあった。これらの人物像の体現する問題が「ロマン主義的なもの」というキーワードのもと集中的に考察されたことが論じられる。

続く第三章「イロニーについての知見の拡大過程」は、ロマン主義的なものへの没入がロマン主義的イロニーと結びつくものであること、したがって「イロニーからの自由」という課題に対する答えとはなりえないことから、キェルケゴールがイロニーそのものの包括的考察へと進むことを論じている。この考察は、イロニーと対立しつつもそれと密接につながるフモールの概念と関連づけられ、拡張・深化していった。

第四章「様々な美学的考察——イロニー論との関連において」では、こうした背景のもと、美学にかかわる幅広いテーマにキェルケゴールが取り組んでいくプロセスをたどっている。特

に同時代の議論に影響を受けつつ、詩の発展形式、悲劇と喜劇、ゲーテの『ファウスト』、ハーマンなど、さまざまな主題を論じるなかでイロニーの問題がどのように展開しているかが詳しく検討される。

第五章「イロニーにおける疎外の問題とその克服——『イロニーの概念について』を中心に」では、初期美学思想の一つの到達点と目される、1841年のマギスター学位論文『イロニーの概念について』を取り上げている。ここではまず、ソクラテスにおけるイロニーとその問題が考察され、続いてフィヒテ以降の近代的イロニーの諸形態が検討される。キェルケゴールの理解によれば、それらはいずれも「歴史的現実性」の疎外を免れない。これに対して学位論文で提示されるのが「統制されたイロニー」であり、彼の美的「宥和」思想の核となるものであった。

第六章「美的「宥和」の可能性を求めて」は、このように準備されたイロニーの理論がキェルケゴールの思想展開において果たした役割を論じている。学位論文の提出された1840-1841年、キェルケゴールは実生活においても大きな転換を迎えることとなった。レギーネとの婚約と婚約破棄である。木瀬氏によれば、彼はこの婚約破棄を、外見と現実性との間に存在する隔たり、すなわちイロニーとして理解していた。つまり、イロニーは、理論的考察のテーマであるだけでなく、彼自身の実践を自己理解する枠組みでもあったことになる。

最後の第七章「「統制されたイロニー」の戒め——『あれか、これか』第一部のドン・ファン論を中心に」では、以上のような考察や出来事を背景としつつ、キェルケゴールが『あれか、これか』以降の美学的著作を書き始める時期が取り上げられる。そこで目指されたのは、「直接性」と「反省」という両極のどちらかに偏ることを戒めた「統制されたイロニー」を核とし、「イロニーからの自由」に達するという美的「宥和」の理論であった。

結語「美学者としての初期キェルケゴール」では、本論文全体の議論を簡潔に振り返り、宗教的「宥和」と区別された美的「宥和」の理論の意義をあらためて述べている。

論文審査においては、議論の核となるべき「統制されたイロニー」の論じ方が必ずしも十分とはいえないこと、個々のテキストにもとづく論証が時に明瞭さを欠くこと、あるいは、デンマーク語原典に関する誤解・誤訳などが指摘された。また、研究文献についても偏りがあり、特に英語圏で出ている近年の研究への目配りが足りないという意見もあった。この点は、後日公刊する際には解消すべきことが求められた。ただし、こうした批判や疑問にもかかわらず、それらは本論文の高い学術的価値を損なうものではないという点で、審査員全員の意見の一致を見た。

以上の審査の後、審査委員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。